

2019年度
地球環境『自然学』講座
第20回

テーマ
人類学者の社会的責任

講 師

東京大学名誉教授

尾本 恵市 先生

2020年2月22日

認定NPO法人・シニア自然大学校

講師プロフィール

尾本 恵市（おもと けいいち）

1. 経歴

1933 年東京生まれ

1952～1961 東京大学教養学部理 2、同文学部独文、
同理学部人類学科、同大学院修士課程。

1961～1964 ドイツ留学（ミュンヘン、フライブルク）

1964～1994 東京大学理学部人類学・助手、講師、助教授、
教授、1993～1999 国際日本文化研究センター教授。

1999～2004 桃山学院大学教授、2004～2009 総合研究大学院
大学上級研究員。

2009～国際人類民族科学連合名誉会員

2015 瑞宝中綬賞受勲

日本学術会議連携会員、日本人類学会名誉会員など。



2. 現職

東京大学名誉教授、国際日本文化研究センター名誉教授

3. 著書

『ヒトの発見：分子で探るわれわれのルーツ』（読売新聞社、1987）

『分子人類学と日本人の起源』（裳華房、1996）

『ヒトはいかにして生まれたか』（岩波書店、1997）

『ヒトと文明：狩猟採集民から現代を見る』（ちくま新書、2016）

山極寿一と共著『日本の人類学』（ちくま新書、2017）

編著：

『海のアジア 全6巻』（岩波書店、2000～2001）

『日本文化としての将棋』（三元社、2002）

『人類の自己家畜化と現代』（人文書院、2002）

『教養としての将棋』（講談社現代新書、2019）

訳書（越智典子と共訳）：

アシュレー・モンターギュ『ネオテニー：新しい人類進化論』（どうぶつ社、
1986）

講演等記録：

川勝平太との対談「多様な存在を受け入れる情緒という感性～文明世界の袋小路に挑
戦する日本の総合人類学とは～（ふじのくに 35, 2019）

総合人間学会基調講演「人類学の新たな総合化をめざして－DNAから人権まで－
（総合人間学 13 号、ハーベスト社、2019）

講演「人類は何処へ行くのか？」（地球システム・倫理学会会報 14 号、2019）

「人類学者の社会的責任」

尾本恵市

私が「人類学者です」というと、「文化人類学ですね」と言われることが多い。しかし、それは誤解である。もともと人類学は、人間（ヒト）という動物を自然科学的に理解しようとする学問だった。現在、研究対象と方法論によって化石人類学、分子人類学、形態人類学、生態人類学、霊長類学、人類進化論等の研究・教育がなされている。

一方、「人間とは何か？」という問いに答えるためには、個別の専門に加えて現代人が直面する地球環境、現代文明、人権等の大問題が人間に与える影響を見る必要があろう。演者は1960年代より遺伝子による分子人類学の専門研究を行ってきたが、その中で、先住民とくに我が国のアイヌやフィリピンのネグリト等の狩猟採集民の起源に関する遺伝学的研究を行った。しかし大学を定年退職するころから、専門にとらわれない学際研究に興味に移り、狩猟採集民こそがヒトの歴史を相対化する希少な存在であると気づいた。しかし、現在ではこれらの人々はごく少数が人間生活圏の周縁に生き延びているばかりか、あらたな侵入者を前に生活は様々な困難に直面している。私は、かつて遺伝的

起源を研究した上述の集団に特別の共感と興味をもっていたので、人権問題についても調べることにした。とくに、アイヌの場合は日本国による同化政策と先住民族としての歴史の無視からくる人権問題、またネグリトの場合には大規模鉱山開発等によって生じた人権問題である。

これらの問題に直面したとき、はじめて私は従来の人類学の専門分野だけでは理解できない様々な問題があることに気づいた。ヒトの進化の研究を中心とする従来の自然人類学には先住民族を含む現代人が直面する文明の在り方という観点が欠けていたのではないか。自然科学としての性格から多少逸脱しても、ヒトの現状と未来を考える総括的な人類学が必要であろう。そのような人類学の目標として、私は「DNA から人権まで」というキーワードを提唱している。この講演では、次の項目によって私の考えを述べたい

① はじめに、②人類学とは？、③文化と文明、④日本の先住民族アイヌ、⑤

フィリピンの先住民族ネグリト、⑥人類学の社会的責任。

参考図書：

尾本恵市『ヒトと文明－狩猟採集民から現代を見る』（ちくま新書、2016）

山極寿一・尾本恵市『日本の人類学』（ちくま新書、2017）